様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００８１２

研究課題名（和文）スマートフォンを用いた動画制作活動が英語学習者のスピーキングにもたらす効果

研究課題名（英文）Smartphone filming (tentative)

研究代表者
桐村　亮（Kirimura, Ryo）

立命館大学・経済学部・教授

研究者番号：４０５８４０９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：スマートフォンを用いた動画制作活動が英語スピーキングに与える影響を主に動機づけの視点から調査した。学習者は短い動画を撮影し、その作品を互いに評価し合った。質問紙調査や課題実施時の記録からは、動画と対面発表で統計的に際立った差異は見られなかったが、学習者を一定の傾向からクラスターに分けた分析では、英語の重要性を感じながらも、スピーキングに不安のある学習者には、動画制作がスピーキング不安を和らげる効果を持つ可能性が示された。プレゼンテーションを行う前の練習として、動画制作が有効であることが示唆される。学習目的や学習者のタイプによって、動画制作課題をどのように取り入れていくかが今後の研究課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スマートフォンの普及と品質の向上により、動画を撮影し、編集し、それを共有することが、誰にとっても簡単なことになりつつある。外国語教育においても、この動画撮影の教育的活用法の開発とその効果検証の必要性は急速に高まっている。本研究は、日本の大学英語教育の環境において、特に英語スピーキングに不安を抱える学習者にとって、スマートフォンの動画機能を用いた学習タスクが、スピーキング不安の軽減ならびに学習意欲の向上に資する可能性を示した。身近になったスマートフォンの動画機能の活用により、学習者のタイプや学習目的に合わせた新たな外国語学習方法が開発され、その効果検証が進んでいくことが今後さらに期待される。

研究成果の概要（英文）：The impact of smartphone filming activities on English speaking was investigated mainly from a motivational perspective. Although the questionnaire survey and the descriptive records made during the implementation of the task did not show statistically significant differences between video and face-to-face presentations, the analysis of learners divided into clusters based on certain tendencies indicated that video production may have an effect on learners who feel the importance of English but are anxious about speaking, and that video production may alleviate their anxiety. It is suggested that video production is effective as practice before giving a presentation. How to incorporate video production tasks according to learning objectives and learner types will be an issue for future research.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語スピーキング　大学英語教育　動画制作　外国語教育　動機づけ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

情報通信技術（ICT）の急速な発達・普及に伴い、外国語教育においても、その様々な活用法の検討が進んでいる。とりわけモバイル機器の教育的活用を中心とした MALL（mobile-assisted language learning）は、世界的に関心が高まっており、各領域で、教育実践と研究が進められている（例えば、Duman, Orhon & Gedik, 2014）。また、学習者側の ICT の活用状況にも急速な変化が見られ、例えば、総務省（2017）の通信利用動向調査では、日本の 20 代のスマートフォン個人保有率は、2011 年の 44.8%から 2016 年には 94.2%まで急増している。個人保有スマートフォンの教育的活用の環境は整いつつあると言える。

ただ、Ushioda（2013）は、MALL といっても、学習者個人がその学習法に対してどのくらい動機付けられているかが重要であり、モバイル機器というツールの特性上、深い学びにつなげることは難しいと指摘している。また、MALL の実践報告が増加する中でも、その用途としては、語彙や文法学習用アプリを使った学習や、情報検索、映像視聴など、インプット面での活用がまだ主流であり、アウトプット活動に使った実践事例は国内外でまだ少ないという実態がある。

一方で、外国語教育のスピーキング指導にビデオ録画を用いることの有用性は、これまでにも議論されてきた（例えば、Bailey & Dugard, 2007）。しかし、数年前までは、ビデオカメラを数台購入して、容量の大きな映像データを編集・管理して、有効活用するというのは、手間とコストのかかることであった。今、ほぼすべての大学生がスマートフォンを日常的に持ち歩き、各自が動画を簡単に撮影し、編集し、デジタルファイルで共有できる。これに伴う追加コストはほとんどかからない。スマートフォンの動画撮影機能の活用で、スピーキングを気軽に練習する機会が定着することは、4 技能をバランスよく育成することを目指す日本の英語教育の方向性とも一致する。

本研究は、スマートフォンによる動画制作活動を英語授業の一部に取り入れることの効果を、学習者の情意面と英語力の変化から実証的に示し、その仕組みを解明しようと試みるものである。本研究の学術的「問い」として、スマートフォンを用いた動画制作活動は、英語学習者のスピーキングに対する不安を軽減するか、また、英語学習者のスピーキングに対する動機付けを高めるか、という点を挙げて、その検証を試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、スマートフォンを使用した動画制作活動が英語学習者のスピーキングに対する姿勢にどのような影響を与え、また、英語力向上にどの程度貢献するかを検証することである。さらに、その検証結果を公表するとともに、EFL 環境で、英語スピーキング指導を行う際の、便利かつ有効な学習活動として、動画制作活動を取り入れることを勧奨することも目的とする。

なお、本研究の狙いとして、以下の 3 つの学術的視点を考慮した。

(1) 第二言語使用不安

第二言語の学習には、不自由な言語を使用することによる学習者の不安、周囲の評価を意識し、失敗を恐れるが故のさらなる不安があるとされている（MacLintyre, 1999）。対面や、聴衆の前での発表ではなく、自らのスピーキングを撮影して、その動画を提示するという形をとることで、不安を軽減できるのではないか。

(2) 動機づけ

動画制作活動が動機付け向上に資する可能性は、複合的な根拠がある。課題に対して、どう向き合うか、何をどこで撮影するか、提出までに何度撮り直すか、どんな編集を施すのか等、学習者の自己決定に委ねる割合が高いとするならば、Deci & Ryan（1985）が発展させた自己決定理論に基づくと、動機は高まると考えられる。また、新しい機器の使用に対する本質的な興味がある場合も、学習動機につながると考えられる（Stockwell, 2013）。

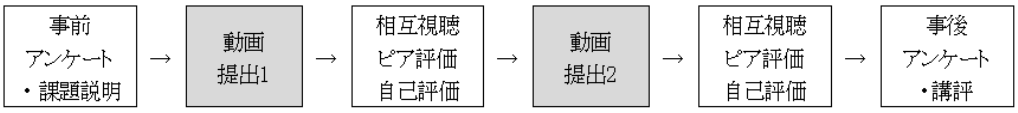
(3) 自己評価・ピア評価

研究で実践する動画課題は、そのプロセスに、クラスで動画を共有して、自己評価とピア評価（クラス内での相互評価）を取り入れる。まず動画撮影によって、普段は見ることのない自分のスピーキングを自己モニタリングすることができ、納得いくまで撮り直すことも可能である。これは動画制作課題が本来的にもつ大きなメリットである。ピア評価は、Lundstrom & Baker（2009）が指摘するように、評価を受ける側も評価をする側も学びを得る可能性がある。さらに、クラスメイトが話す姿を動画で何度も視聴できることは、自身にとっての near-peer role models（Murphey, 1996）を見つける機会となり、それが、英語のネイティブ・スピーカーをモデルとするよりも、より実現可能なモデルとして機能し、学習者のやる気を高める可能性に期待できる（Cook, 1999）。

３．研究の方法

本研究は、大学生を研究対象および協力者として、授業実践の中で行う実証的研究であり、下

に示すような調査プロセスを基本とした。



(1) 事前・事後の質問紙調査（5 件法、17 項目）により、英語スピーキングや動画撮影等に対する学習者の気持ちや姿勢を尋ね、課題の前後で、どのように変化したかを調査する。
(2) 動画提出 1 として、一定の指示のもとに各自制作した動画を、クラス内で共有し、相互に視聴できる状態とする。
(3) 動画の提出後は、各学習者は、全員の動画作品を視聴する。その際、ピア評価（学習者間の評価）と自己評価を行う。評価は、本研究チームが作成した評価基準と、多肢選択項目、自由記述からなる評価シートに基づいて実施し、その内容は、すべて記録される。この振り返りにより、学習者が何に気づき、何を評価し、それを自分の次の作品にどう生かそうとしているか等を調査する。
(4) 動画提出 2 は、自己評価やピア評価を通じた、各自の「気づき」にしたがって、さらに改善されたものが提出されることを期待するものである。発展的には、授業の状況が許せば、動画提出 3 を設けて、さらなる学習効果を図ることも視野に入れる。
(5) 事後アンケートを終えた後、データ分析を実施するとともに、任意の学生の協力を募って、インタビュー法により、課題の過程における気づき、課題に対する評価などの聴取を行う。
(6) この一連のプロセスを、動画制作課題のクラス（実験群）と他のアウトプット課題（例：クラス内のスピーチ）のクラス（統制群）に分けて実施することで、両者の間に、学習者の不安や動機づけ、発話量、総学習時間、発話内容の深さ等に、どの程度有意な差異があるかを測定する。

実際の課題実践では、私立大学の文系学部の 1, 2 年生を対象として、1 回 30 秒間の Show & Tell（クラスメイトに紹介したいものを見せながら、その説明を英語で行う課題）を実施した。実験群（スマートフォン撮影）81 名と統制群（対面での発表）33 名、計 114 名分の有効データを取得した。分析対象データは、事前・事後の質問紙調査、動画作品、動画の自己評価およびピア評価である。

４．研究成果

質問紙調査の結果からは、英語の必要性認識、学習動機づけ、スピーキング不安の各項目ともに、実験群、統制群ともに、事前・事後で有意な差は見られなかった。今回の Show & Tell のような、短期の単発課題の前後では、大きな情意面での変化が生じることはないと推察できる。なお、課題取組状況を実験群と統制群の平均値で見ると、実験群は、自主的に課題に取り組む時間が長いという傾向が見られた。課題取組時間は、スピーキングだけでなく、動画編集の時間も含む点は留意が必要であるが、より時間をかけて課題に取り組む仕組みづくりとしての可能性は見られた。

次に質問紙のデータをもとにしたクラスター分析により、実験群の学習者を 3 つのクラスターに分けて傾向を見た。その結果、もともと英語が好きで、スピーキング不安が低い学習者群にとっては、直接オーディエンスを前にして話すことを好む傾向があるため、動画制作が必ずしも有効な手段とはならないが、一方で、英語の重要性は認めながらも、英語スピーキング不安の強い学習者層にとっては、動画制作が、スピーキング不安を和らげる効果を持つという傾向が見られた。この結果により、学習者に一律に動画制作が効果を持つわけではないが、英語で話すのが得意でない層には、対面プレゼンテーションの前の練習・リハーサルとして、自分で動画を撮影することが、不安を解消し、意欲を高める可能性があることが示唆された。

また、学習者が動画制作後に行った自己評価やピア評価の記述には、この課題により多くのことを学んだことが記されていた。特に 1 回目の動画制作後に、クラスメイトの作品を見ることによって、英語発話のコツ、話す強弱や「間」、オーディエンスを意識することの重要性などへの意識が促され、それが 2 回目の動画制作に生かされていることがわかった。また、他者の作品と自分の作品を比較することで、自分のパフォーマンスには何が足りないかを気づかせ、それが次の動画の質が大きく向上する要因となっていた。2 回目が終わった後でも、次の機会にはもっとこうしたい、というような前向きなコメントが多く見られた点も特筆すべき点である。

初年度の実験結果からは、データ収集の方法やタイミング、被験者の属性等、他の要因が結果に影響を及ぼした可能性は否定できず（たとえば、慣れないスピーキングテストを実施した直後にアンケートを取ると、アンケート結果にそのテストの影響が出る等）、同様の調査を行う際に、調査対象や実施環境をより厳密に統制する必要性が改めて明確になり、その方法の見直しを検討していたが、2020 年からの新型コロナウイルス対策で大学教育現場が様々な影響を受ける中、想定していた実験群（動画での発表）と統制群（対面発表）での課題活動をさらに展開することが困難となった。その後、全面的に遠隔授業が取り入れられる中で、動画制作課題は当初のプロセスに少し修正を加えながら実践し、実験群として 220 名分のデータ蓄積ができた。その一方で、他の要因をコントロールした状態で、対面での実施、すなわち統制群の実践ができず、より

発展した調査の実施・分析には至らなかった。

本研究の実施期間においては、新型コロナウイルス対策が強いられる中で、急速な技術発展もあり、大学教育現場も大きく変わることとなった。遠隔会議システムが一気に普及し、教員にとっても、学生にとっても、動画の制作と共有の機会はさらに増すこととなった。この間の関連研究の出版状況を見ても、動画制作を英語スピーキングに活用する実践報告が数多く報告されており（たとえば、Belmekki, 2023)、その効果検証の必要性は一気に高まっている。本研究での経験をもとに、ICT を効果的に用いた外国語教育、特にスピーキング指導の新たな手法開発と効果検証は引き続き今後の課題とする。

＜引用文献＞

① Bailey, R., & Dugard, C. (2007). Lights, Camera, Action!: Digital Video in the Language Classroom. CILT, the National Centre for Languages.

② Belmekki, M. (2023). The Effect of Self-Video Recording on the Development of Students' Speaking skill in Higher Education. The Journal of Quality in Education, 13(21), 21-31.

③ Cárdenas Sánchez, S. E., Moyota Amaguaya, P. P., & Gallegos Núñez, M. M. (2022). The impact of video recording in EFL oral production tasks with college students. ConcienciaDigital, 5(3.1), 119-128.

④ Cook, V. J. (1999). Going beyond the Native Speaker in Language Teaching. TESOL Quarterly, 33(2), 185-209.

⑤ Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior. Berlin: Springer Science & Business Media.

⑥ Kukulska-Hulme, A. (2013). Mobile-assisted language learning. In C. Chapelle (Ed.), The encyclopedia of applied linguistics (pp. 3701-3709). Wiley.

⑦ Le, V. H. H., & Nguyen, H. N. (2021). Mobile phones' video recording tool: A solution to freshmen's english-speaking anxiety. International Journal of Computer-Assisted Language Learning and Teaching, 11(2), 16-32.

⑧ Lundstrom, K., & Baker, W. (2009). To give is better than to receive: the benefits of peer review to the reviewer's own writing. Journal of Second Language Writing, 18(1), 30-43.

⑨ MacIntyre, P. D. (1999). Language anxiety: A review of the research for language teachers. In D. J. Young (Ed.), Affect in Foreign Language and Second Language Learning: A Practical Guide to Creating a Low-anxiety Classroom Atmosphere (pp. 24-45). McGraw-Hill.

⑩ Murphey, T. (1996). Near peer role models. Teachers Talking to Teachers, 4(3), 21-22.

⑪ Stockwell, G. (2013). Technology and motivation in English language teaching and learning. In E. Ushioda (Ed.), International perspectives in motivation: Language learning and professional challenges (pp. 156-175). Palgrave Macmillan.

⑫ Ushioda, E. (2013). Motivation Matters in Mobile Language Learning: A Brief Commentary. Language Learning & Technology, 17(3), 1-5.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Ryo Kirimura, Tomohito Hiromori, Masahiro Yoshimura
２．発表標題 Motivational Effects of Smartphone-enabled Video Recording on Speaking Activities in EFL Courses
３．学会等名 World Congress on Education 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	廣森　友人 (Hiromori Tomohito) (30448378)	明治大学・国際日本学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	吉村　征洋 (Yoshimura Masahiro) (90524471)	龍谷大学・農学部・准教授 (34316)	
研究分担者	仁科　恭徳 (Nishina Yasunori) (00572778)	神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授 (34509)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関